



TITLE:

吉村さんをしのんで

AUTHOR(S):

坂寄, 俊雄

---

CITATION:

坂寄, 俊雄. 吉村さんをしのんで. 経済論叢 1966, 97(2): 243-244

ISSUE DATE:

1966-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/133112>

RIGHT:

# 經濟論叢

第九十七卷 第二號

---

哀 辭

故吉村達次教授遺影および原稿

国債発行と金融政策 .....	中 谷 実	1
アージリスの組織理論 (1) .....	田 杉 競	16
貸借対照表という用語の創出過程 .....	高 寺 貞 男	30
独占価格と生産価格 .....	松 石 勝 彦	51

記 事

吉村教授逝く

追悼文 (池上 惇 林 直道 松井 清)

追憶談 (坂寄俊雄 稲垣 武 原田篤己)

故吉村達次教授略歴・著作目録

---

昭和四十一年二月

京都大學經濟學會

## 追 憶 談

## 吉村さんをしのんで

坂 寄 俊 雄

吉村さんを知ったのは1939年京大に入ったときであった。吉村さんは3回生、私は1回生であった。中国への侵略戦争は本格化しており、大学への自治への干渉も東大の蘭学事件で頂点に達していたといつてよい頃であった。東大の経済学部がつぶされるのではないかということで京大に入ったのであったが、大学の講義でマルクス経済学は殆んど全くきかれなかった。河上先生、京大事件の伝統の息吹きは感じられなかった。堀川先生が会計学の講義の中で労働価値説を生かされようとしておられたことと、石川興二先生がマルクスの学説を石川先生流に話されていた程度であった。

そのような中で吉村さんたちは研究会活動や学友会活動を通じてマルキシズムに関心を持つ学生の組織化に積極的に努力されていた。もっとも、吉村さんは組織活動の第1線では活動されず、もっとばらブレーン的であり、研究指導の面で活動されていたように思われる。2年も先輩だと距離があるし、当時の組織活動については詳しいことをきいていないので吉村さんがどんな役割を担当して活動していたのかはわからないが、私の思い出の中にある当時の吉村さんはマルキシズムを理解するためにはヘーゲルや、アダム・スミスのもの、特にヘーゲルの「歴史哲学緒論」や論理学を読むように主張していたことが残っている。

また、堀川警察から西陣警察にうつされたときも吉村さんと一緒になった。検挙されてから1ヶ月間も既にたっていたが、まだ1度も風呂にゆかしてもらっていないのだと吉村さんがいったことが今でも印象深く残っている。その後、要求して一緒に風呂屋に行った。そのときの彼のせいせいした顔とちょっと目まいを起したときなどが目に浮んでくる。さし入れにこられたお母さんに対する吉村さんのものやわらかだった姿なども思いだされる。

吉村さんの学生時代の印象としては学究的な面の強い、ものやわらかい感じの人だった。そんなことから戦後、吉村さんが大学で組合の役員となって積極的に活動しているのを見て変ったなあと思ったことがあった。

戦後というか、ここ数年の吉村さんは研究者の組織化にすごく熱を入れていたように思われる。京都の民科経済部会が今日まで続いてきたのも彼に負うところが多いように思われる。彼は民科をどうにかして拡大したいと思っていたし、日本科学者会議の結成には大変な努力をはらっていた。そのような組織活動の難しさにいたっては折にふれて

彼からいろいろのことをきかされたが、ぐちらしいことは殆んどいわなかった。ある時、すごく疲れているので、皆なに手伝ってもらうようにされたらという話をしたことがあったが、彼はそれが仲々難しいのだといって自分でせせとやっていた。そのように自分を酷使しても周囲の者に負担をかけることをしない人だった。

このように研究者の組織化に努力していたが、研究をもっとやりたいということをとくときもらしていた。殊に、昨年12月末に会ったときは来年からは研究に力をいれるのだといていた。その研究計画のようなものも若干話していたが、こんなことになるとは夢ももっていなかったのでき流してしまった。ただ、彼の人民のための科学の研究スタイルについて具体的な例をあげて語ったことは記憶している。ここで彼が語った具体的な例をあげて書くことは紙数の都合上できないが、抽象的にいうと理論を理論として抽象的に展開するのではなく、労働者階級の運命にかかわらしめて具体的に展開する必要があるというようなことをいていた。

大変、個人的な思い出を書いてしまった。しかも、印象的に。吉村さん、読者の方々にお許しをいただきたい。